



行政視察報告書

*期 日 令和7年11月5日(水)～11月7日(金)

*調査地 長崎県長崎市

まちぶらプロジェクトについて

福岡県久留米市

久留米まち旅博覧会について

茨城県古河市議会

産業建設常任委員会

*関係資料については、議会事務局に保管してあります。

令和7年12月19日報告

委員長	稲葉貴大
副委員長	佐々木英徳
委員	関口和男
〃	小森谷博之
〃	赤坂育男
〃	増田悟
〃	黒川輝男

【長崎市の概要】

長崎市は、西側、南側、東側は海に面していて、五島灘、橘湾、大村湾が広がっており、長崎港内の平坦な中心部の地区には、商業・業務機能が集積し、長崎港を中心としたすり鉢状の地形に形成された斜面市街地とあいまって、独特の都市景観が形成されている。一方、周辺地区は、海、山などの豊かな自然に囲まれている。

長崎の地名は、この地が長い岬状の地形をしていたことから起こったといわれており、その発展の歴史は、元亀元年(1570年)ポルトガルの宣教師フィゲイレドによって良港であることが発見され、翌年、領主大村純忠によって開港されたときに始まる。

その後は、キリスト教の布教の根拠地となったため、ヨーロッパの各種の文化が流入し、いわゆる南蛮文化は長崎に重要な影響を与えた。1639年以後の鎖国により、西欧文化導入の唯一の門戸となったことで、その後200数十年にわたり独占的な繁栄を極めた。しかし、安政の開国とともにその地位を失い、古い港町から近代的産業都市への転換を始めた。造船工業を基点とし、大正から昭和初期にかけて漁業基地としての地位を確立したことなどにより、次第に躍進を遂げていった。

昭和20年8月9日には原子爆弾による惨禍を被ったが、戦後は核兵器廃絶と世界恒久平和を訴える国際平和文化都市としての役割を果たしている。造船業と水産業は戦前の水準を上回り、古い西欧文化の影響を受けた独特の歴史的文化遺産と美しい自然に恵まれた観光都市として、国内外において大きく脚光を浴びている。

長崎市は今、100年に一度と言われる進化の時を迎えており、2021年にはMICE施設として出島メッセ長崎や、恐竜博物館が完成し、2022年には西九州新幹線の開通と新しい駅も開業した。2023年1月には、魚の町の市公会堂跡地に移転した新市庁舎（地上19階、地下1階）が開庁し、さらに2024年にはプロサッカーチーム、V・ファーレン長崎のホームスタジアムも完成した。変化しているのはまちのかたちだけではなく、若い人が新しい事業や活動を立ち上げる動きも生まれている。

●人 口：383,418人
(R7.10.1現在)

●世帯数：186,140世帯
(R7.10.1現在)

●面 積：405.69km²

【調査事項】

（１）事業の目的について

歴史的な文化や伝統に培われた「まちなか」の賑わいの再生を図るため、5つのエリアの個性や魅力の顕在化などを進めるための整備やソフト事業を市民などと連携しながら進める。

（２）事業に至る背景や経緯について

現在長崎のまちは100年に一度の変革の時期を迎えており、「まちなか」と呼んでいる新大工エリア、中島川・寺町・丸山エリア、浜町・銅座エリア、館内・新地エリア、東山手・南山手エリア、陸の玄関口である長崎駅周辺、そして海の玄関口である松が枝周辺等の周辺施設で今様々な事業が展開している。

陸の玄関口である長崎駅では、令和3年度に交流拠点施設の出島メッセ長崎が完成し、令和4年度には西九州新幹線が開業、令和6年度にはサッカースタジアムを中心とした複合施設の長崎スタジアムシティが開業し、現在は長崎駅周辺の再整備の完成を目指して鋭意事業を進めている。また、長崎駅より南方の松が枝国際観光船埠頭の岸壁を延伸して、2バース化する事業も進行している。

このように長崎の街が大きく変化する時期を契機と捉え、長崎の歴史と文化に培われた「まちなか」エリアの魅力をさらに加えて、まちの賑わいを生み出そうとする取り組みである。

長崎のまちが今後も個性あるまちとしてあり続けるために、「まちなか」の賑わいを再生する検討委員会が平成18年から始動し、平成20年にまちなか再生に係る基本方針を定め、この中で市民が主役というキーワードが作られ、スローガンとした。

市民が主体となって、まちづくりに取り組むことで、より良いものが生まれると考え、まちづくり座談会等の協議会を通して、地域とともに街中の将来像をデザインしてきた。

そして、「まちなか」再生のために必要な事業を取りまとめ、平成25年にまちぶらプロジェクトが始動した。

（３）事業の手法について

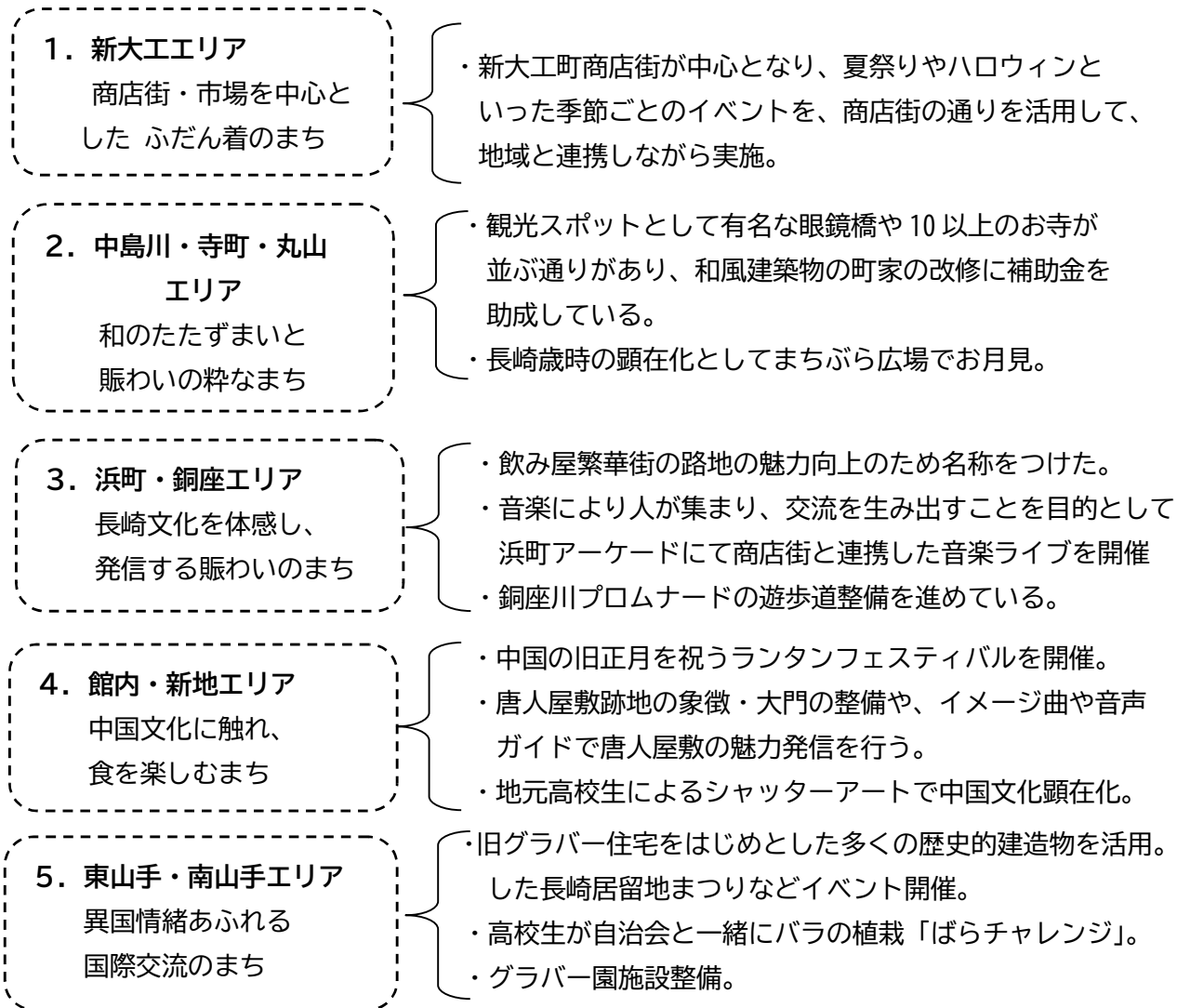
計画期間

平成25年度から西九州新幹線が開業する令和4年度までの10年間を区切りとし、今後も引き続き取り組みを継続する。

計画の構成

①エリアの魅力づくり

5つの各エリアにおいて、まちづくりの方向性を掲げ、各エリアが持つ特色を活かしながら、エリア内の魅力の向上に結びつくような取り組みを進める。



②軸づくり

「まちなか」の5エリアを通り最北端から最南端を繋げる軸を「まちなか軸」と呼び、「まちなか軸」を基軸として、各エリア間の回遊性を高める環境の整備（歩車道やトイレ休憩所等）を行う。また、「陸の玄関口」である長崎駅周辺や、「海の玄関口」である松が枝周辺等の施設との連携軸の整備により、まちなかへの誘導を図る。

③地域力によるまちづくり

地域や市民自らが企業や行政、NPO等の多様な組織と連携を図りながら、まちを守り、育て、創るために行動し、その集積が「まちなか」

を支えるような地域や市民力を結集する取り組みを進める。

- ▶**まちなか賑わいづくり活動支援事業**・・・「まちなか」の賑わいづくりに取り組む市民や民間事業者のスタートアップをサポートする補助金制度
- ▶**まちぶらプロジェクト認定制度**・・・市民や民間事業者等の賑わいづくりの取り組みをまちぶらプロジェクトに認定して、継続的な支援を行う取り組み（現在の事業認定数：108）

計画の進め方

「まちぶらプロジェクト」の推進にあたっては、中心市街地の活性化に関する法律第9条に基づく「長崎市中心市街地活性化基本計画」、都市再生特別措置法第46条に基づく「都市再生整備計画（まちなか地区）」、及び都市再生推進事業制度要綱第2条の5に基づく「長崎市中央部・臨海地域（まちなかエリア整備計画）」などに位置づけながら、財源の確保に努めるとともに、法律上の特例や税制の優遇など国の支援策の活用を図る。

（４）事業の効果・成果について

新大工町地区市街地再開発事業や、町家の維持、再現にかかる助成、唐人屋敷跡顕在化事業、まちぶらプロジェクト認定事業などにより、減少傾向であったまちなか歩行者通行量が、コロナ禍前には増加傾向に転じるなど、一定の成果を上げてきた。

令和4年度に10年の区切りを迎え、まちぶらプロジェクト認定事業者に対してアンケートを実施したところ、「まちの賑わいづくりに関心を持つ人が増えた」、「行政がサポートしてくれることで活動しやすくなった」など、プロジェクトの効果を感じられる意見が多くあった。

一方で、まちなかの賑わいを実感できている人は過半数に満たず、さらなる賑わい創出のため、令和5年度に「まちぶらNEXT交流会」を開催し、各エリア内で活動するイベンターや事業者が連携、情報共有を行えるようにした。

（５）今後の展開及び課題等について

まちぶらプロジェクトはまちの新しい楽しみ方の提案でもあり、10年間の取り組みを継続するとともに、情報発信と多様性のある環境づくりなどを進めながらまちの魅力を磨き、より賑わいのあるまちとなるよう、市民や事業者が一堂に参加できる意見交換会や交流会を実施し、進化するプロジェクトとして取り組みを進める。

また、長崎駅周辺やスタジアムシティの整備が進む中、まちなかの活力を維持していくために、集客拠点からまちなかへの人の流れをつくり、市民と行政が連携しながら新たなにぎわいの維持・創出を図り、まちなかに絶えず人がいて、賑わいが生みだされる状況を創っていく。

【久留米市の概要】

久留米市は、九州の北部、福岡県南西部に位置し、九州の中心都市である福岡市から約 40 キロメートルの距離にある。市域は東西 32.27 キロメートル、南北 15.99 キロメートルと東西に長い形状を示している。また、県南部の中核都市で、九州自動車道と大分・長崎自動車道のクロスポイントにも近く、国道 3 号ほか 5 つの国道が通っていて、交通の要衝となっている。

地勢は、市の北東部から西部にかけて九州一の大河・筑後川が貫流し、筑後川に沿って南側を東西に耳納山、高良山、明星山などの山々が連なっている。

気候は、内陸型の有明気候区に属し、気温の年較差や降水量の年変化が大きいものの雪は少なく、温暖で四季の変化に富んでいる。

多彩な食文化は魅力の一つであり、世界的な人気を誇るとんこつラーメンは久留米が発祥の地であり、焼きとり「ダルム」などが知られる。日本酒は、神戸の灘、京都の伏見と並び、三大酒どころの一つに数えられる。

「花とフルーツのまち」としても知られ、梅林寺外苑の梅、久留米つばき園のつばきなど、フルーツの生産はぶどう、いちごなどが特に有名である。

伝統工芸が息づく土地であり、江戸時代に井上传が考案した「久留米緋」をはじめ、竹を編んで漆を塗り重ねる「籃胎漆器」などさまざまな伝統工芸が発展した。そして、古くは「からくり儀右衛門」と呼ばれた現在の(株)東芝の創業者である田中久重をはじめ、ものづくりの精神も脈々と受け継がれている。

近代以降はアサヒシューズ(株)や(株)ムーンスターの前身が発案したゴム底の地下足袋など、世界に誇るゴム産業のまちとして発展してきた。さらに、現在は自動車メーカーの生産拠点が集まっている。

名高い寺社が数多く存在し、時代を越えて多くの人々の崇敬を集めており、JR 久留米駅近くにある「水天宮」は全国にある水天宮の総本宮である。文化芸術の分野においても数多くの著名人を輩出した土地としても知られており、昭和以降では、音楽・芸能の分野で特に活躍が目覚ましく、「上を向いて歩こう」を作曲した中村八大、松田聖子などのミュージシャンや、田中麗奈、藤吉久美子などの俳優が久留米出身者として注目されている。

●人 口：299,357人

(R7.10.1 現在)

●世帯数：144,551世帯

RR7.10.1 現在)

●面 積：229.96 km²

【調査事項】

(1) 事業の目的について

- ・久留米市の地域資源を発掘し、**着地型の体験交流**を実施することで、交流人口の拡大による**地域活性化、イメージ向上、ブランド化**を図る。
- ・久留米市及び近隣市町村を訪れる観光客の多くは「通過型」であるため、「**滞在型**」に**転換**させ、滞在時間を長くして、より経済効果を高める。

(2) 事業に至る背景や経緯について

- ①旅行や観光のスタイルが、「**団体旅行**」から「**個人旅行**」へ、
また、「**見る観光**」から「**体験する観光**」へと変化（モノ消費⇒コト消費）
- ②キラークンテンツはないが、自然や文化、食、ものづくりなど、「**磨けば光る**」**地域資源**があるものの、観光資源として認知されていない
⇒ブランド化

■平成 18 年度

（公財）久留米観光コンベンション国際交流協会と協力しながら、久留米市の自然、文化芸術、産業などの**地域資源**を活用した**体験交流型**の新しい観光商品の開発を検討

⇒平成 23 年 3 月の九州新幹線開業を見据えて

■平成 19 年度

民間メンバーを中心とするワーキングチームや、専門家の支援のもと、付加価値の高い観光商品開発に取り組む

■平成 20 年度

「久留米まち旅博覧会」スタート（事務局：（公財）久留米観光コンベンション国際交流協会）

(3) 事業の手法について

- ・（公財）久留米観光コンベンション国際交流協会への補助事業
⇒同協会が事務局を担い、実施にかかる費用の一部について補助金交付
- ・事業実施主体である「**久留米観光コンベンション国際交流協会**」とまち旅のキーマンであり「**NPO法人 久留米ブランド研究会**」が各実施者の支援を行いながらプログラムを実施。

※「NPO法人 久留米ブランド研究会」

市町村合併後、新市としての特徴ある産品やおみやげ物などが特定しづらい状況の中、九州新幹線鹿児島ルート全線開業を契機に、久留米のブランド力向上に向けた活動を展開することを目的に、平成 24 年に団体成立。

⇒まち旅のキーマンとして、運営、支援を行う。

	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
運営委員会	運営方針の検討 企画会議	選定会議 ⇒実施プログラム選定 ブラッシュアップ	決起大会				報告会
プログラム実施者	プログラムの企画			プログラムの準備	プログラム実施		
事務局	会議運営	選定会議運営	決起大会運営	予約受付開始	プログラム開催支援		報告会運営

※事務局

久留米観光コンベンション国際交流協会

⇒平成24年度～NPO法人 久留米ブランド研究会

※法人の規模縮小により令和5年度よりアドバイザーとして支援

⇒令和5年度～久留米観光コンベンション国際交流協会

(4) 事業の効果・成果について

効果

①市民・事業者自身による地域の魅力の再発見

「まち旅」は、市民が主体性をもって企画から実施までを行っており、地元にながら知らなかった新たな魅力を発見し、来た人をもてなしたいと思う心と、久留米に対する誇りを醸成。

②人材の育成をネットワーク化

約120名に及ぶあらゆる業種の実施者の横断的ネットワークができたことで、業種の枠を超えた交流が生まれ、活動に広がりをもたらしている。

成果

①交流人口の拡大

これまでの開催による延べ参加者数は、24,000人以上。

「まち旅」をきっかけに久留米に初めて来た人も数多くいる。

②久留米市のイメージアップ・認知度アップ

これまで捉えどころのなかった久留米の地域資源、魅力が「まち旅」という「形」として具体的に捉えられるようになり、久留米のイメージ向上に貢献。また、海外を含む全国からの視察にも数多く対応しており、認知度の向上にもつながっている。

(5) 今後の展開及び課題等について

課題

①域外の認知度向上、集客促進

市外からの参加者も増加傾向ではあるが、今後プロモーション活動を充実させ、九州域内、関西方面からの誘客にも取り組む必要がある。

②財政的自立化

まち旅の運営にあたり、市の補助金が多くを占めているため、自主財源の確保が必要。

③まち旅プログラムの旅行商品化

ビジネスとして成り立つ商品づくりのためにプログラムの磨き上げを行うとともに、常時受け入れが出来る体制づくりに取り組み、旅行会社や交通事業者等に対するプロモーションを行い、旅行商品化につなげていく必要がある。

また、インバウンド向けメニューの開拓など、さらなる発展が必要。

④ネットワークの再構築と人材育成

コロナで寸断されたネットワークを新しい体制の中でどう再構築していくか、実施者による主体的な活動を促し、人材を育成していく運営方法の再検討が必要。

展望

①魅力あるまち旅プログラムの造成

引き続き、あらゆる業種に取り組みながら新しいプログラムを造成していくことで、久留米の魅力向上につなげる。

②域外や旅行会社等へのプロモーション

旅行会社や交通事業者等に対してプロモーションを行い、旅行商品化に取り組む。

③さらなる人材のネットワーク化

これまでに培った人材ネットワークを有効活用し、地域に密着した市民協働による観光振興に取り組む。

コロナで中止していた、実施者間の意見交換の場作りなどを実施する。

【視察後記】

今年度の行政視察は、長崎県長崎市において「まちぶらプロジェクトについて」、また、福岡県久留米市において、「久留米まち旅博覧会について」、それぞれの取り組みを研修してきた。

長崎市が推進する「まちぶらプロジェクト」は、“まちなか”の賑わいを再生することを目的としており、各エリアの特色を活かした整備やソフト事業が展開されている。対象となる5つのエリアは、新大工エリア（商店街・市場を中心としたふだん着のまち）、中島川・寺町・丸山エリア（和のたたずまいと賑わいの粋なまち）、浜町・銅座エリア（長崎文化を体感し、発信する賑いのまち）、館内・新地エリア（中国文化に触れ、食を楽しむまち）、東山手・南山手エリア（異国情緒あふれる国際交流のまち）で構成されている。視察では、中島川・寺町・丸山エリアにおける歴史的街並みと現代的賑わいの融合、浜町・銅座エリアでの街歩きの楽しさを確認した。市民や企業が主体となり、行政が伴走する形で進められている点も印象的であり、地域力によるまちづくりの成果を肌で感じる事ができた。これらの手法は古河市においても応用可能であり、例えば歴史的建造物や商店街を活かしたエリアづくり、また市民主体のイベント展開などにより、古河市の魅力を更に高めることに役立つと感じた。

久留米市が開催する「久留米まち旅博覧会」は、体験交流型の旅プランであり、地元の人々が企画・案内する手づくりのプログラムを通じて、自然、農業、伝統工芸、歴史遺産、食文化など久留米ならではの魅力を体験できる点が特徴である。特に印象的であったのは、事業実施手法として市民主体の企画会議を重ね、開催前には決起大会で関係者の士気を高め、終了後には報告会で成果を共有するという一連の流れである。また、「まち旅は磨けばキラリと光る、地域資源の『あるもの探し』。市民に『してもらおう』のではなく、市民が『主役』のおもてなし。」という理念のもと、市民が主体的に関わり、地域の魅力を再発見しながら来訪者を迎える姿勢に強く共感した。観光振興のみならず、地域活性化に大きく寄与する取り組みであると実感した視察となった。今回、学んだ長崎市、久留米市の事例を参考に、積極的に取り入れて市政発展のために取り組んでまいりたい。

【視察風景】



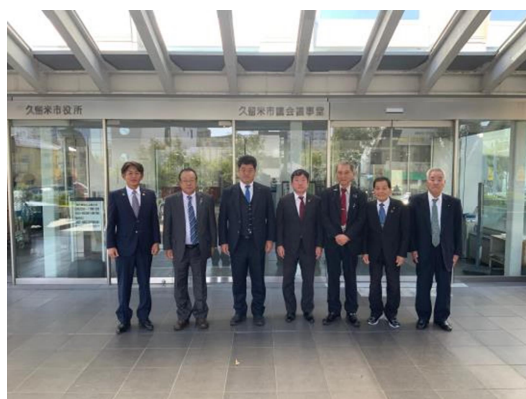
長崎市議場



中島川回遊路視察



久留米市視察風景



久留米市役所前